

進修同窓会々報

発行 土浦一高進修同窓会

編集 同窓会会報編集委員会

〒300-0051 茨城県土浦市真鍋4-4-2

TEL(029)822-0137(代) FAX(029)826-3521

ホームページ <http://www.sin-syu.jp/>



土浦一高校歌

堀越 晋 作詞
尾崎 楠馬 作曲

一、沃野一望数百里 関八州の重鎮として
そそり立ちたり筑波山 空の碧をさながらに
湛えて寄する漣波は 終古渝らぬ霞浦の水

二、春の彌生は桜川 其の源の香を載せて
流に浮ぶ花筏 蘆の枯葉に秋立てば
渡る雁声冴えて 湖心に澄むや月の影

三、此の山水の美を享けて 我に寛雅の度量あり
此の秀麗の気を享けて 我に至誠の精神あり
東国男児の血を享けて 我に武勇の気魄あり

四、筑波の山のいや高く 霞ヶ浦のいや広く
嗚呼 桜水の旗立てて 我が校風を輝かせ
亀城一千の健男児 亀城一千の健男児

目次

2 頁	会長あいさつ
3 頁	学校長あいさつ
3 頁	平成27年度総会報告
3 頁	新任職員紹介
4 頁	卒業60周年記念同窓会
4 頁	卒業50周年記念同窓会
4 頁	卒業15周年記念同窓会
5 頁	山崎先生の思い出
6 頁	恩師を訪ねて
7 頁	卒業生レポート②⑩
8 頁	支部・OB会だより
9 頁	母校だより 職員室だより
10 頁	部活動報告
11 頁	進路状況報告等
12 頁	平成26年度決算報告等



同窓会会長あいさつ

幡谷 浩史

(高4回・併2回)

同窓会会員の皆様には、誠に於かれましては、平日より当会運営にご協力ご支援をいただき、誠にありがとうございます。お陰様でスムーズな会運営が出来ておりますことに、深く感謝申し上げます。

今夏は例年にない猛暑が続き、全国500ヶ所余の観測地点で連日35℃超えとなる記録的な酷暑となりました。気象庁を始め関係機関や関係団体は、連日マスコミを通して熱中症に対する水分補給等の健康管理のPRに努め、さらに高齢社会への対処に懸命な努力をされました。

さて、学校創立120周年に向けて同窓会も着々と準備を進める中、矢張り旧本館校舎(国重要文化財)の保全改修が最大の案件であります。前号にも既述しましたが、3・11以降、各地の震災被害は甚大であり、本件の文化財の優先順位は相当低いものと覚悟しておりましたが、文化庁、茨城県当局の高配のもと、周年行事までには屋根スレート工事を始め全面改修が完了出来る見通しとなり、最終の詰めに至っています。但し、これらの改修費は受益者負担の意味もあり、当同窓会が相当額を負担する条件で決着します。我が

母校のシンボルである旧本館校舎は、次世代へ繋ぐべき大切な財産です。で、全員参加型の募金とし、多くの皆さんに呼びかけをお願いすることになります。詳細については、本部役員・学年幹事・募金担当委員等で逐次ご説明、ご案内いたします。文化財は失われたら、当時の人々がそれに込めた思いも消え失せてしまいます。学校教育の場として、美しい建築物を建てた先輩に感謝するとともに百年前が偲ばれます。

日本の古い家族制度は消滅し、個人の自由が最優先される時代になりました。しかし、「子育て」は親にとつて為さねばならない務めであり、その責任は重く、それぞれが向き合っていると考えなければならぬものです。我々の世代は、先輩として積極的に若い世代と交流し、その責務や負担を分かち合い、支えとなる努力と取組みが今の社会には必要だと考えます。

文武両道の在校生生徒達の一層の活躍、発展を願いつつ、勉学にスポーツ、そしてクラブ活動にと、全面的な支援活動を今後も引き続き行なっていく所存です。



学校長あいさつ

学校長 横島 義昭

進修同窓会の皆様にはご健勝のこととお慶び申し上げます。また、日頃より物心両面に亘り多大なるご支援を賜り厚く御礼申し上げます。

私は今年4月、県内有数の大規模校、創立18年の伝統校、全国屈指の進学校である本校に県教育庁高校教育課から赴任しました。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、本校全日制では、「高い知性」と「豊かな人間性」を兼ね備えた「社会の役に立つ人材」を育成するため、様々な取り組みを行っています。

「高い知性」の獲得に当たっては、授業第一主義を掲げ、高いレベルの授業を行うとともに、キャリア教育の充実にも努めています。生徒は高い「志」の実現に向けて難関大学を目指しており、平成27年度入試では、東大合格23人(うち現役15人は全国公立高校第2位)など素晴らしい結果を残しています。

また、「豊かな人間性」を養うため、部活動や学校行事活動を積極的に奨励しています。部活動加入者数は県内トップであり、インターハイ県予選大会では、テニス部とソフトテニス部が県優勝、硬式野球部が夏の大会・秋の大会で県ベスト16になりました。嬉しい限りです。本校自慢の行事「一高祭」は、生徒が主体的に企画運営しています。質の高い企画が奏功し過去最

高の6300人余の出入となりました。

このような人材育成の取り組みに加え、昨年度から文部科学省のSGH(スーパーグローバルハイスクール)の研究指定により、「世界で活躍するグローバルリーダー」育成にも努めています。特に、これまで弱点であった課題解決能力やコミュニケーション能力の補強に取り組んでいます。海外フィールドワーク等の課題研究の実践を通して、世界に目を向ける生徒が増加するなど、着実に成果が上がっています。

創設67年を迎える本校定時制は、高校入試の志願倍率が県内で最も高く、人気校となっています。80歳代のご年配の方を始め様々なニーズを持った生徒が温かい雰囲気の中で意欲的に学んでいます。

本校のシンボルである旧本館は、同窓会のご尽力により、いよいよ今年度から改修工事を始める運びとなりました。創立120周年の平成29年には、創建当時の壮麗な姿が見られることを心待ちにしています。

今後とも、「不易流行」をモットーに本校発展のため精一杯努力する所存です。皆様のお力添えをお願いするとともに、同窓会ますますのご発展と皆様方のご健勝ご活躍を祈念してご挨拶いたします。

平成27年度

進修同窓会総会開かれる

去る4月11日(土)、本年度の進修同窓会定期総会が、母校土浦一高体育館において、祝賀周年卒業生等を含む約520名の皆様のご出席を得て、盛大に開催されました。

総会は、応援指導部の元気づっぱいのリードと吹奏楽部の演奏とに合わせた、校歌・応援歌・一高讃歌の斉唱で開会。物故会員への黙祷、幡谷会長・横島校長の挨拶と続いた後、山田副会長を議長に選出し、議事に移りました。平成26年度事業報告及び決算報告、平成27年度事業計画案及び予算案、規約改正案、役員改選案が、審議の結果、原案どおり承認可決され、また、創立120周年記念事業、来年度以降の総会日等も原案どおり承認されました。この後、役員退任者に対する感謝状贈呈、代表生徒による第6回生徒海外研修



幡谷浩史会長の挨拶

(進修同窓会助成事業の一つ。詳細については土浦一高HP)の成果報告があり、総会は終了しました。

続いて、卒業60周年(高7回・定5回)、卒業50周年(高17回・定15回)、卒業40周年(高27回・理数4回・定25回)、卒業25周年(高42回・理数19回・定40回)、卒業15周年(高52回・理数29回・定50回)の節目を迎えた皆様に対する卒業周年祝賀式が挙行されました。高山了氏(高18回)よりの祝辞、幡谷会長よりの臨席者への記念品贈呈と続き、最後に坂本榮氏(高17回)より謝辞が述べられました。

この後、会場を移し、学年ごとの懇親会が、各幹事のお骨折りで催されました。そこでは、恩師や旧友との再会を喜び合うとともに、思い出話や近況報告などに花が咲き、大いに盛り上がりしました。



応援指導部のリードのもとでの校歌斉唱

また役員・一般の方の懇親会は、部活動等で登校した現役生を交え、校内食堂で開催されました。生徒達からは、伝統を受け継ぐ一高生としての誇りを胸に、勉学や部活動に励む学校生活が報告されました。それらは、若さと情熱をぶつけた自らの高校時代と重なり、懐かしくもあり、勇気を与えられるものとなりました。

卒業60周年記念同窓会

高7回 永井 洋光

昭和30年3月に卒業した高7回生は卒業60周年の招待を受けて、平成27年4月11日に母校に参集しました。周年記念の招待はこれが最後です。

この日は小雨そぼ降る肌寒い陽気でした。全国各地から86人が出席し、顔立ちのどこかに昔の面影を留め、頭の禿げと白髪、顔のシワは“人生の勲章”と言いたげな表情です。

記念式典は体育館で在校生の吹奏楽と応援指導部が掲げる校旗の入場が始まり、久々の高校生気分になりました。

ホテルに移ってからの歓談は和やかな雰囲気になりました。感動したのは高校1年生時に撮影したA組からG組までのクラス別の集合写真です。写真は学校の倉庫に眠っていたものを、幹事が高7回生分を1冊のアルバムに編纂して、出席者全員に配りました。昭和27年入学時は自分のクラス以外

の集合写真など誰も持っていない。貧しい時代でした。集合写真の余白には生徒の氏名を整列順に、今は亡き担任の先生が手書きで記入しています。老眼鏡で一人ひとりを眺めると、高校時代がつい先日の如く甦ります。

東京大学名誉教授(大型コンピュータの権威)と筑波大学名誉教授(歴史学の大家)の2人は卒業60年を待たずに鬼籍に入りましたが、1年生時から学問を究めようとする風貌が窺えます。

詰襟の男生徒の中にセーラー服の女生徒が一人。彼女は大学で心理学を専攻し、社会に出てからは児童福祉をライフワークとして“自立する女性”を実践しました。ひたすら勉学に励んだ代表格と言えましょう。

一方、スポーツに打ち込んだ面々も。特に野球、バスケット、卓球などは常に上位にランクされ、野球では昭和29年夏の県大会で準優勝し、ベストナインに3人も選ばれました。ただ、大学進学を目標とする教育方針からか、先生の中には部活を辞めて、受験勉強に専念しようとする説得もあったとか。でも、生徒は“我が道を行く”初心を貫き身体能力の可能性を追求しました。

今では信じられないエピソードも。「俺が乗るまで待てー」と動き始めた筑波線の汽車を止めてしまった豪傑もいます。同輩は多士済々、実に個性豊かです。

歓談の中で、幹事の松本茂男君が挨拶に立ち、卒業60周年の準備過程に触れて「秦勝君がいなかったら盛大な同期会は出来なかった」と述べました。卒業後60年間、幹事諸氏がコアとなり、高7回生の絆を繋ぎ止めたのです。

私は、改めて幹事諸氏に敬意と感謝の念を表する思いになりました。



新任職員紹介

教頭 鈴木 正人



今年度四月に赴任致しました。歴史と伝統ある土浦一高、母校愛にあふれた進

修同窓会のために、微力ながら尽力してまいりますので、よろしくお願い致します。

卒業50周年記念同窓会

高17回 坂本 栄



卒業してから50年だから年齢70が目前。ほとんどがリタイアしていることもあり、卒40年の集まりよりも出席率が高かった。進修同窓会総会と一緒に「卒業60・50・40・25・15周年記念祝賀会」(体育館)には119人、そのあとの同窓祝宴(市内式場)には120人が参加。5年ぶりに作成した同窓名簿によると、各クラス(A-G、平均55人)の逝去者は平均5人。9%が世を去ったことになる。

2015年は先の大戦に敗れてから70年の節目の年。メディアではいろいろな企画が組まれたが、戦後派とはいえ「団塊の世代」の先陣(1946〜47年生まれ)にとっても振り返ることが多かった。昔の平均寿命(1960年)男65歳、女70歳を考えると、先

輩方がリードした高度成長による医療・栄養の充実がなければ、卒業50周年は成立しなかっただろう。祝宴では「東京五輪(2020年)、リニア新幹線名古屋開通(2027年)、同大阪開通(2045年)まで生き抜き、名古屋、大阪で同窓会をやる」と提案した。

総会・祝賀会では、幡谷浩史会長から、映画やTVのロケによく使われる旧本館(記念写真の背景)改修のため、寄付の呼び掛けがあった。築120年弱の経年劣化に加え、先の大震災で大分痛み、放置すると廃屋になってしまう。旧本館は土浦市のシンボルにもなっており、卒業生のノスタルジーだけでなく、観光資源としても大事な建物。大改修には国や県の予算も付いているとのこと。答辞の中で出席同窓にも「年金生活者であり、多額は無理と思うが、できるだけ協力を」と相応の寄付をお願いした。

土浦一高の自慢は120年の歴史ばかりでない。50年前には存在しなかった研究学園都市が隣接つくば市に出現。同市に住む高学歴者の子供のシェアが増え、平均・上位学力が格段にアップしたことも自慢してよい。その指標となる東大入学は水戸一高を大きくリード、公立校・現役では全国二位(一位は日比谷)という。

ところが、10年前のTX(つくば一秋葉原)開通により、つくばの優秀な中学生は東京の高校も選

択できるようになった。また、県南の私立高が中高一貫制を採用、優秀生の奪い合いが激化している。歴史遺産・旧本館も大事だが、学校としてはこうした地政学的変化、教育システムの進化に対応しないと、シンボルも輝きを失う。県立校の制約はあると思うが、創立150年に向け、土浦一高も中高一貫(全国の優秀生を念頭に寄宿舎も用意)を導入したらどうか。

卒業50周年記念同窓会

定15回 武石 進

平成27年は、進修同窓会定時制部会の会長の責務と15回卒の50周年記念同窓会もあり、更に前年病を得て、1ヶ月入院退院後半年自宅療養中、という次第で不安の幕明けでした。

しかし、級友、部会役員、学校側の援助を賜り、4月11日11時より給食室に於いて部会総会を開催



いたしました。

出席者は鑾として60周年の福原邦男、内村安男両先輩以下7名、50周年は峰岸功、田中津介両君以下3名、40周年は総会準備でお世話になった高橋俊秋さんでした。皆様おめでとうございました。

式は校歌斉唱、横島義昭校長の祝詞に続いて、佃敦之教頭の在校生徒についてのお話では、同窓会会報でも掲載されている様に定時制通信制大会で剣道部、陸上部、バドミントン部等の運動部では、優勝者を多数出し、文化関係でも八十歳代の吉田郷里さんが生活体験発表「学校で学ぶということ」と題し茨城新聞社賞を受賞する等、正に文武両道の実践で、翻って我々も元気、やる気を頂き嬉し

い限りです。草刈宏明顧問の後任で水戸南高校の定通教育振興会にも25年度より出席させて頂きましたが、今年度より「坂東太郎」青谷社長、小美玉市「そらら」河原井さんを迎え、力強さを感じました。

在校中は、「親の心子知らず」で漠然と学生時代(卓球部で汗を流しては居た)を過ごしていた事を反省し、先生方の真摯な取り組みに恐縮するばかりです。

部会もたけなわとなり、弁当を食べながら昔話に花が咲き部会総会はお開きになりました。

13時からは体育館で行われる卒業各周年の祝賀式へ向います。今回は式終了後の祝賀会にも出席し

たかったが、15回生の同窓会幹事役もあり中座させて頂いた。

最後になりましたが、守谷SAに出店し多忙な同窓生七野満さんには、多大な寄付を頂き紙面を借りてお礼申し上げます。

また部会には21回卒の宮本源一さん、浦野和夫さんは新理事として入会され少し遅くも若返りが出来たと思っています。

関係皆様様の献身的な協力に厚く感謝すると共に進修同窓会の益々の発展をご祈念申し上げます。

卒業15周年記念同窓会

高52回 高野 陽輔

『15年前。それは、ちょうど今この学び舎で学び始めた初々しい一年生たちが生まれた年です。私たちも15歳の時に、晴れがましい気持ちでこの学び舎に足を踏み入れました。そして3年間鍛えられ、さらに15年間社会に採まれ生き残ってきました。つまり私たち一人一人の胸中には、高校3年間を中心とするシンメトリカルな「自分史年表」(33年分)ができてあがっていることになりました。この事実

は、単に時間的な中心に高校生活があることを表しているだけではありません。人生の中心に高校生生活があることをも表していると言えます。それほどまでに、この学び舎での生活は、刺激に満ち知的で決定的でした。』

4月11日、私達普通科52回・理

数科29回卒業生は、卒業周年記念祝賀式にご招待いただき、母校の門をくぐりました。そして15年前の卒業式とは違う新体育館で、先輩方とともに祝辞をいただきました。当日資料としていただいた進修同窓会総会の冊子には、私達の代表として寺澤秀哉君による謝辞が掲載されています。冒頭の文章はその一部です。同窓会総会および祝賀式は、人生における高校時代を見つめ直す機会になったと同時に、土浦一高の歴史における私たちの座標を知る機会となりました。

祝賀式終了後、学年懇親会会場に移動し、お世話になった先生方やさらに多くの同級生と合流しました。懇親会は近況報告や在学当時の思い出など各所で話に花が咲き、大いに盛り上がりしました。互いに成長した仲間との語らいは、楽しく懐かしいだけでなく、本当に刺激的でした。一高の友がかけがえない存在であることを実感しました。

会の中盤では、当時校長先生でいらつしやった長瀬先生や学年の先生方から温かい励ましのお言葉と、これからの人生を歩むためのヒントをいただきました。そして終盤では、何人もの同期生や先生方から「次は10年後ではなく5年後に」という声が上がリ、5年後の再会を幹事が宣言して閉会となりました。

卒業15周年記念同窓会は、充実

した貴重な時間となりました。今回仕事や家庭などで忙しく参加できなかった同期生を含め、「2000年卒業生」が5年後再会できるのを心より楽しみにしております。

最後になりますが、このような機会を与えてくださった進修同窓会、様々なサポートをしてくださった本部役員の皆さまに厚く御礼申し上げますと共に、母校の益々の発展を祈念いたします。



山崎先生の思い出

中45回 戸張礼記

昭和3年生生まれの私は、昭和16年4月に土浦中学校に入学し、1年丁組に入った。担任は山崎長治郎先生(中28回)であった。数学の先生で、授業では鋭い目つきで、指名されたならば答えねばならず、いつもどきどきしていた。厳しくもみっちり指導された感じが強い。ある時、代数の参考書として良いものを尋ねると、岩切精二の本を推薦してくれた。この本は、後に中学校で数学を教えた時にも随分と助けられた(戦後、小中学校の教員として39年間勤務。主に理科を担当)。また、2年生からは直接指導を受けることはなかったが、阿見町塙の田舎者が町場に行き、不安いっばいの1年生の時に出会った先生に対しては、特別に深い印象があると言える。山崎先生にとつては、母校での最初の担任クラスであり、相当の思い入れがあったと思う(山崎先生は、本会報58号で「土中生としての自負心と大きな希望に胸を張り澁刺とした行動は、頼もしい限りでありました。先輩としても十分に應えてやらねば、と心を引き締める毎日でありました。」と吐露されている)。

その後、4年生の昭和19年6月に、私は予科練のあった土浦海軍航空隊に入隊した。そこで、同じ年の10月頃に召集された山崎先生を一度見かけたことがあった。私は兵長となっていたが、先生は、2等兵として側溝のゴミさらいをしていた。その時はお声をかけること

はできなかった。(土中出身の先輩方は、予科練の敷地内で先生を囲む会を催していたようだ。)

昭和30年頃に、同窓会が開かれ、そこでまた、先生にお目にかかる機会を得た。恐る恐る近づき、私のことを覚えていらつしやるかどうかを聞いてみた。すると「数学の参考書を聞きにくるなど、熱心だったのでよく覚えている。」と話された。これに私は痛く感激した。会う機会はその後しばらくなかったが、先生のご自宅近くの集落に住む姉から、94歳になられても元気でおられるのを聞き及び、先生のお住まいにおじゃましていただき、大変喜んでくださり、一緒に記念写真も撮った。奥様と共に能をなさっているとのことだった。それから少し時間をおいて今度は、土浦の社教センターで偶然にお会いした。その日は「能楽講座」の講師としていらつしやっていたとのことであった。そして昨年、私の義兄の葬儀の際に、同じ斎場の別室で山崎先生の葬儀の準備が進められているのに出くわした。翌日、「ご自宅に向くと、納棺の時であり、お顔を見届けるとともに、ご子息様に入学した時の記念写真を差し上げた(後に「棺に入れた」との報告をいただいた)」。以上が山崎先生との思い出である。

当時の学校状況についてもふれると、同年の入学生は200名で、50名ずつ甲・乙・丙・丁の各組があった。前年までは制服が学生服・学生帽であったが、私たちの時からカーキ色の国民服・戦闘帽・巻脚

絆・地下足袋となった。午後は配属将校による教練の時間が多く、腹ばいで進む匍匐(ほふく)前進・わら人形に剣をさす銃剣術などがあり、かなり辛かった。部活動は、飛行機乗りにあこがれていたため、グライダー(5mぐらい浮上)で空を飛び滑空班に入った。通学は自転車で、1時間半ほどかかった。君原尋常小学校出身の同級生は渡邊光夫・栗山光夫両君と私の3人。途中の舟島で通学を邪魔するガキ大将が出るので、いつも3人一緒に登下校していた。これを我々は「3機編隊」と呼んでいた。阿弥神社前の店で氷やとろてんを食べるのも楽しみであった。(平成27年1月19日収録)

※戸張氏は現在、阿見町予科練平和記念館歴史調査員として、「知られざる予科練の真の心」を熱く語り継ぐ活動を行っていらつしやいます。



1年丁組入学記念(昭和16年4月)最前列中央が山崎先生 山崎先生宅訪問記念(右上)

恩師を訪ねて

英語科 小沼 三郎先生

昭和47年4月〜平成2年3月在職



爽やかに晴れた秋の或る日、城下町の名残を今なお残す土浦市中央2丁目の、閑静な住宅地の一角に先生を訪ね、久闊を叙した後、恐れ乍ら来意を告げた。先生は、当時のままの優しく穏やかな表情で、執筆を快諾してくださった。

ここに、お寄せ頂いた玉稿を掲載させていただきます。

戦時下の中学生生活
始めに、70有余年前に溯り、乏しい記憶をたどりながら、戦時下に送った中学生生活を振り返ってみます。

私は昭和17年4月に旧制土浦中学校に合格し入学しました。時は前年暮れ12月8日太平洋戦争が勃発し、緒戦での勝利がラジオと新聞によって報道され、国民は喜びに湧いている頃でした。胸躍らせて真鍋台上の正門(当時)を入り、目に入った玄關の広さに目を見張り、長い廊下や広々とした教室、高い天井に驚きました。当時は入学時から詰め襟でなく、制服は国防色に戦闘帽をかぶり、足にはゲートルを巻いて登校しました。先生と上級生には拳手の礼でした。軍事色が日毎に浸透して来たのです。でも学校は平常通りの授

業で部活動もあり、プールでの水泳競技や運動会やマラソン大会等の行事もあり平穩無事な生活でした。入学して1週間、入試の多いのに驚きました。当時週末考査といつて土曜日毎に国漢、数学、英語の考査があり順番に行われ、考査の時は必死で勉強しました。と言うのも成績評価は厳しく、1科目でも成績不振の場合進級できない事になっていたのです。学校は日毎に軍事色が濃くなって来ましたが、当時教科に「教練」があり軍隊式の教育で、先生には予備役将校の先生が2名おられ、現役将校が配属将校として配属され「軍事教練」を指導されました。校庭の片隅には「銃器庫」があり、そこには三八式歩兵銃がずらりと並んでいました。これを担いでの行軍や射撃法や銃の手入れ法等を指導されました。この授業は辛かった事が未だ忘れません。18年の頃から春秋の農繁期に出征兵士のいる農家に奉仕作業をする日が多くなり、2年の時奉仕作業の一環として佐谷まで歩き、農家に数日分宿して暗渠排水作業をやりました。かなりの重労働でした。食糧の乏しい時代あの時食べた銀めしの味は忘れません。19年に入り学校は平常通りの授業でしたが戦局の悪化に伴い、暗く憂鬱な日々が続いていました。20年1月から私達は海軍航空廠へ学業を放棄して動員されることになり、それは8月15日の終戦の日まで継続されました。初めは養成班に入りハンマーの使い方、やすりのかけ方等を指導され、その後各部門に配属され、私は飛行機部品係となり微用工員と一緒に働きました。多くの部品

をリヤカーにのせて工場内を運ぶのです。暑い日など木蔭の路肩で休んでいると、後ろから若い技術将校が自販車で近付き、「その学徒、何をしとるか」と大声でどなられた事もありました。彼等は威張っていたものでした。動員機B51からの機銃掃射をうけ、一目散に防空壕に駆け込んだこともあり、やがて戦局は大本営発表とは裏腹に敗色日に日に増し、遂に8月15日の終戦を迎えたのです。終戦を告げる玉音放送を広場に集合して聴きましたが、雑音が多く聴きとれず、即座には分からず、しばらくして降伏受諾だと分かり、皆茫然自失、誰一人言葉を交す者は見当りません。張り詰めていた心の糸が切れてあの時の虚脱感はい言いますことが出来ませんでした。9月から学校へ戻るようにとの指示で戻りましたが、落ち着いた生活に移るまで時間がかかりました。21年の2月だったか、それまでの方針として4年修了を認められていた関係で、そのまま卒業するか5年に進級するか悩んだが、1年近くの空白を埋めねばと考え進級に決めました。従って私達学年は二分され今日まで続いています。

5年になり進路に悩んだ時、英語担任の林卯一郎先生(故人)に相談してみよう。先生は「これから益々必要になると言う」と言われ、好きな教科でもあったのでその方向に進もうと心に決めました。思えば、激動の時代に送った中学生生活で、辛いこと、楽しいこと、往事を回想すると、今は亡き恩師の顔が次々と脳裏を去来し、その授業風景と重ね合わせ懐かしさを受けられなかった悔しさの反面、共に動員で苦勞し、同じ釜の飯を食べた者同士の絆は今だに強いものがあることを誇りにしています。

一高教師のころ

私は教師の道を志し、昭和27年竜ヶ崎一高に赴任し、34年土浦工業高、44年緑岡高校と勤務し、昭和47年4月母校に赴任しました。卒業以来24年振りの母校でした。来てみると大職員室がなく、教科毎の職員室に分かれていました。英語科は当時定時制の建物に同居し、現在の正門近くでした。朝、会や出席簿の受取り等は旧本館まで行かねばならず面倒でした。授業では、生徒は私語もなく、態度もよく、熱心に授業と取り組んでいることでした。そして非常によく勉強していました。当時生徒は一人様に皮の学生カバンを持ち、しかもそれを切り取る程膨らまして登校して来るのです。その向学心には感心しました。それに質問の多いのに驚きました。授業が終るや必ず数名の生徒が教卓を囲み質問するのです。従って教科指導では教材研究に日夜励んだもので、更に先生方が授業をより大切にするに努めていたことでした。チャイムが鳴ると同時に授業につく態勢をとっているのです。従って自習時間は作らず、出張等の場合は前以て交換することが慣例でした。これは今も続いていると思います。私は50年10月に16日間短期海外派遣の一員として、小・中学校の先生方と共に米国の教育事情を視察する機会を与えられました。私達は殆ど飛行機で、又西部の太平洋を横断しました。行く先々で、先生方や生徒達が玄関先に「ようこそ」と日本語で書いた横断幕を掲げ、熱烈な歓迎をしてくれました。テキサス州オデッサでは、空港に到着するより多数の方々が迎えに来てくれ、その模様が翌日の地元新聞に写真付きの記事を載せてくれました。訪問先では、先生方は勿論生徒とも話合うことが出来ましたが、どの生徒も臆せず自分の考えをはっきり述べる姿勢には深く感じ入りました。案内してくれた生徒達のマナーの良さにも感心しました。私はアメリカの教育、文化、風俗その他を見聞きし、有意義な研修旅行でした。忘れ得ぬ思い出です。

56年に学年主任を仰せ付け、多忙の日々となりました。早速学年行事計画に従って共同宿泊学習の実施でした。4月早々から各班で委員を選び、委員会を組織し、計画をねり、下見をし、コースの設定をし、実施に備えたのです。担当委員の協力の下、生徒委員もよくやってくれ、1・2年時共生徒と起居を共にし、2泊3日の宿泊学習を無事に済ませたことを懐かしく思い出します。又学年後援会設立を控え、会長以下役員を選出したところ快諾を頂き、ありがとうございました。生徒の希望進路を実現するため、各担任は年中随時随所個人面談を行ないました。こうして担任から適切なアドバイスを受け、生徒にとって良き目標、指針となったと思います。常に心にかかることは、生徒をそれぞれ志望校へ合格させることでした。そのため校外模試や課外授業など出来る限り実施しました。そして更に前預かりした生徒全員を卒業させることが出来るかどうかでした。各担任の懸命な指導と協力により全員卒業出来たことが何より嬉しいことでした。3年間の学年担当は多忙を極め、目まぐるしい毎日でしたが、貴重な体験だったと思います。一高教師となつて18年間、書き尽くせませんが、良き教育環境の中、常に生徒を思い、教科指導に努力を続ける先生方と、知的優秀さを持つ生徒達に囲まれて送った日々を幸せだったと思ひ、感謝の気持ちで一杯です。

おわりに

時移り、私は80代半ばを過ぎ、往時を思い起こすと、よくぞ今日まで生きてこれたものと沁々思い感謝の日々です。今はおだやかに一日一日を楽しみ過ごしていきたいと思ふばかりのこの頃です。

卒業生レポート

20

「テレジンの少年たちが遺したもの」

昭和37年卒

林 (旧姓広沢) 幸子



2年前に、国の重要文化財となつてゐる母校の旧教室に立たせていただきました。一高在学中は、先生方にとつてかなりの問題児であつたと思う私が、懐かしい一高の教室で話をさせてもらひ、ましてや、現在も活躍中の諸先輩、後輩を差し置いてこの欄に書かせてもらうという栄誉は、私にとつては少し重荷でした。一度はお断りしようかとも思ひましたが、どうしても伝えたいことがあり、僥倖ながらお引き受けしました。

まず、第2次世界大戦時チエコ共和国のテレジンユダヤ人強制収容所内で書かれた14歳の少年の文章をお読みください。

「一九四二年十二月十一日土曜日の前夜に、大変なことが起こりました。それは、私たちのテレジンでの歴史に、とても大きな影響を与えるに違いありません。私たちは自分たちの自治組織をつくつたのです」(拙著『テレジンの子どもたちから』より。以下、(一)

内の太字は同書から引用)

テレジン強制収容所は、チエコの首都プラハから北西に約60kmの街に、ナチスによって作られました。元々は18世紀にオーストリアのヨーゼフ二世がプロシヤ軍の侵攻からプラハなどを守るために作った要塞で、テレジンの名は彼の母親のマリア・テレジアから採つたものです。ポーランドのアウシュヴィッツ絶滅収容所に近いところから、収容人員が満杯になるところから、テレジンは一時待機させたところから、テレジンは「地獄のロビー」とも呼ばれていました。

もう一つのテレジンの特徴は、多くの芸術家が収容され、コンサートなどが開かれていたことです。ナチスはそれを利用して「総統はユダヤ人に新しい街をつくつた」というプロパガンダ映画を制作したり、赤十字の派遣を受け入れて、ユダヤ人の迫害はない、という嘘を証明するためのカモフラージュの強制収容所としたことです。

テレジンは、子どもたちがたくさん絵を残したことでも有名ですが、10歳から16歳の男の子たちは「少年の家」で共同生活をしていました。前述の「自治会組織を作つた」少年たちは、その1号室の少年たちでした。もちろん、ナチス監視下ですから、ナチスに秘密に作つたのは当然です。

彼らは実行委員会に「雑誌編集係」を作り、編集長はペトル・ギ

ンズ君でした。その雑誌の名前は「ヴェデム」(チエコ語・僕らはリードする、という意味)です。彼らは「ヴェデム」に自分たちの置かれてゐる運命や歴史や未来を考えて論文や詩を書き、テレジン収容所内の人々たちをインタビューして記事にし、連載小説やマンガも掲載していたのです。

「ヴェデム」は、毎週金曜日、労働や食事が終わったあとの1号室で、記事を書いた本人が読みあげました。朗読会の前には、全員が起立して「シュキド共和国」(彼らの自治会の名前。ロシアのドストエフスキーが作つた孤児院の名前が由来)の歌を歌っていました。

話は飛びますが、今年3月に私はテレジンから生還し、今はアメリカで生活しているタウシク氏を訪問しました。当時16歳の彼はすでに86歳。テレジンに収容され、1号室の一員として、何よりもこの1冊しかない貴重な「ヴェデム」を、ナチスの目から逃れるために収容所の土塁の中に埋めて戦後まで守つた人なのです。

「私たちは、金曜日の夜になると私たちの雑誌を読む前に皆で『シュキドの歌』を歌つたんですよ」と言つて、70年前の歌を忘れずに歌ってくれたのです。

すべての人は 僕らの兄弟
クリスチャンだろうと
ユダヤ人だろうと

僕は胸を張つて前進しよう
シュキド共和国こそ僕

そして君(曲はチエコの歌で)

少年たちは自分たちのエンブレムを創り、バッジを創りました。それらは、1年半にわたつて作り続けられた「ヴェデム」の800頁の中に残っています。

死と隣り合わせで、というよりも毎日何十人が死に、或いは殺され、満足な食べ物もない悲惨な生

活状況の中で、死と一緒に生きていた少年たち。1号室には13歳から16歳の少年たちが約50名、担任のアイシングル先生と共同生活をしていたのです。

大人たちは、少年たちが生きるための最大限の努力をしていました。それは秘密裏に行われた屋根裏部屋での授業であり、芸術であり、友愛であり、全てにおける忍耐でもありました。少年たちの「僕たちの自治会の発足宣言」は、何度読んでも、涙するほど素晴らしいものです。その一部を紹介します。(『ヴェデム』2号)

「……僕たちは、単に押し付けられた運命を、苦しみながら生きるために集まつただけのグループでいたくないからです。僕たちは友人と仕事と規律との間で、意識をもつた活動的な組織をつくりたいと思つており、自分たちの運命を楽しい意味のある現実に変えたいのです。

彼ら(ファシスト)は、一つの目標をもっています。それは、僕たちを肉体的ではなくて、精神的、道徳的に破壊させることです。彼らはそれに成功するでしょう。うか?いいえ、決して成功しないはず。僕たちは、これまでの文化の基盤を取り上げられても、さらに新しい文化をつくり出します。

憎しみや、数多くの悪意によつて一般の人間社会から引き裂かれた僕たちは、自分の心を憎しみや悪意で固めたりはしません……」

少年たちがこれほどまでに深く考え、心からの言葉として発言できた教育について、現在の私たちは考えねばならないと思います。もちろん当時ユダヤ人の少年たち、大人たちが置かれた立場は最悪の状況であり、現代社会には置き換えられないでしょう。ユダヤ人というだけで人間扱いされない状況、それを許す世界、それに甘

んじる大人たちへの疑問と不満。少年たちは、それらについていろいろと考え、書いています。「民族主義について」(29号)の全文を引用できないのが残念です。この筆者は民族主義と政治、経済、宗教との関係述べていますが、その一部を引用します。

「……支配層が国民の中に民族主義をある程度受け入れさせることができたなら、彼らの勝ちです。……宗教は町や政治集会や学校などの外部の世界から、人間の心に移らなければならぬということ。……民族主義は宗教と同じように、個人のものにならなければなりません。将来の社会では、国家と宗教だけではなく、民族主義としての国民の考え方や政治を分離しなければなりません……」

さらに、「自分の父親を尊敬せよ……!」(26号)では、テレジンや強制収容所への道を選んだしまった自分の父親達の誤りを指摘しながらも、その岐路に立つた父親達を理解し、将来、平和か戦争かへの岐路に自分たちが立つた時の自らの責任を、真剣に書いています。それはまるで、今の日本で岐路に立たされている私たちへの質問のようでもあります。かつての運命は親の責任であり、これからの子どもたちへの責任は、私たち大人が担っていることを肝に銘じなければなりません。

戦後70年。世界は今でも絶え間なくどこかで戦争をしています。世界が平和になるための対話や思考が消えかかっています。どうしたら子どもたちが安全に暮らし、存分に自己の才能を発揮できる社会が来るか考える道筋が、テレジンの少年たちの遺した「ヴェデム」の中にあるような気がします。

支部・OB会だより

常陽銀行亀城会

「常陽銀行亀城会支部」は、常陽銀行内同窓生の親交を深めるため、昭和46年に発足し、現在は総勢154名(男性138名、女性16名)となっています。

当支部では、年1回の定例総会を開催するほか、水戸市内他支部との合同懇親会への参加などが主な活動内容となっています。

当支部会員は行内の各支店・本部等で幅広く活動していますが、日頃なかなか会員同士の交流を得る機会が少ないこともあるため、こうした場合は会員同士の旧交を温めたり、情報交換をしたり、と、大切な機会となっています。

本年6月6日には、土浦市内のホテルにおいて第41回亀城会総会が開催され、本年度の新入会員7名を含め、50余名が出席して盛大に執り行われました。

総会には、母校から倉持副校長、進修同窓会から大曾根副会長にご来賓としてご出席頂き、副校長より母校の近況を、副会長より母校開校前後の歴史をお話しいただきました。

母校の目覚ましい活躍や、その歴史の深さを再確認するとともに母校卒業生であることの意義を感じ、最後に全員で校歌斉唱して同窓会の絆を確かめました。

当支部では、今後も会員のより一層の親睦を図ってまいりますと

ともに、再来年に迎える母校創立120周年記念事業の成功に向けて少しでも役立ちたいと考えております。

常陽銀行は、本年7月30日に創立80周年を迎えました。当行は「健全・協創・地域とともに」を経営理念として、地域の発展のために力を尽くしていく考えであり、当支部としても、この理念のもと、母校や進修同窓会のため少しでもお手伝いして参りたいと考えております。

土浦第一高等学校と進修同窓会の一層のご発展をご祈念申し上げます。

幹事 福島健太郎(高34回)



硬式野球部OB会・亀城クラブ

硬式野球部OB会・亀城クラブの名称の謂れや発足の経緯については、『土浦中学・野球の記録(平成12年2月刊、中学48回卒、色川弘・元誠文堂新光社編集局長と前野宗次郎・元共同印刷常務監査役との両先輩の共編)』の、明治40年の水戸中学との試合の項で、土浦中学を亀城軍と呼んでいる(『野球人国記(誠文堂昭和6年刊)』)ことや、校歌の「亀城健児」からではないかと推測されます。また、中学29回卒中山勇先輩(元大穂町長)が、昭和23年に敗戦後のやりきれない心を癒すべく母校を訪ねた時、白球を無心に追う後輩達を見て、「忘れていた青春はここに

あった、祖国の再建はここから。」と近郊に住むOB達を訪ね歩き、技術面・財政面を担当する亀城倶楽部を創設し、自ら会長を引き受けた、と『卒業50周年記念誌(昭和54年10月刊)』に記されています。

「会則」によると、亀城クラブは昭和23年5月1日に発足、会則の「目的」には、「本会は土浦一高(旧土浦中学)野球部の存続強化発展をはかり、学校当局と連絡を密にし、母校野球部甲子園出場を期する為、現役野球部員の技術向上のための指導及びその活動に協力、援助をなし、会員相互の親睦、教養を深め、社会人としての自覚の向上と責任の遂行をはかる事を目的とする。」とあります。また、「会員及び資格」には、「土

浦一高(旧土浦中学)野球部出身者で、本会の趣旨・目的に賛同せし者、又は本校進修同窓会々員で、野球部発展の為に特に貢献がありとして現会員2名以上より推薦をうけ、常任理事会で承認されし者」とあります。

なお、「野球部卒業生は母校卒業と同時に自動的に入会の資格を有する。」と定められており、毎年卒業式の先日、会長と事務局が出席し入会案内を行っておりま

す。現在、約600余名が会員となっております。

甲子園出場は創立60周年の昭和32年(1957年)でした。北関東大会で優勝し、土浦駅に凱旋した時は、駅頭に1万8千余名の市民が迎え、一高まで提灯行列で送られ、当時の大川長治亀城クラブ会長(中学34回)は、生きてい

るうちは(甲子園に行けるのは)無理だと思っていた、『ご苦労、嶋田、(監督、高校2回)』と言

言っただけ、あとは二人で手を握り合っただけ、というエピソードが残っております。

歴代会長は、創設者の中山勇先輩(中学29回元大穂町長)昭和31年、二代大川長治先輩(中学34回元監督)昭和32～61年、三代嶋田實先輩(高校2回元甲子園監督)昭和62～平9年、四代安藤昌夫先輩(高校7回安藤スポーツ社長)平10～13年、五代神林實先輩(高校10回甲子園副主将)平14～17年、六代嶋田卓光(高校15回)平18年(現在に至っております。尚、初代

中山先輩、二代大川先輩、三代嶋田先輩は鬼籍に入られております。

昭和57年から、夏の大会約1週間前に総会(約40名出席)を開き、年間の事業計画、報告、予算、決算等を審議、終了後現役の選手達と奨励会を兼ねた交流会を開いております。年会費は20歳代5千円、30歳代7千円、40歳以上80歳まで1万円、今年度までの33年間で、後援費及び用具費で3011万円(年間平均91万円)、その他臨時事業(放送室・ダッグアウトの建設)で196万円の計3207万円の支援を行いました。平成19年放送室、平成25年ダッグアウト建設の際には進修同窓会からは多大なご支援を頂き有難うございました。改めてお礼申し上げます。

創立60周年から、また60年の120周年を間もなく迎えますが、それまでに2回目の甲子園出場がOBの願いでもあります。平成15年に選抜21世紀枠候補に推薦されたことは(夏、春ベスト8)記憶に新しく、今年も4回戦まで進出し、甲子園は夢ではありません。現役選手諸君の頑張りによりに期待しているところです。

硬式野球部OB会・亀城クラブ
会長 嶋田 卓光(高校15回)



母校だより

第68回一高祭

3年E組 篠崎 諒

今年度も、今回で第68回となる土浦一高の伝統行事である一高祭を5月30日(土)、5月31日(日)の2日間開催することができました。私たちも伝統の担い手として先輩方から受け継いできたものを引き継ぐことができて嬉しく思います。

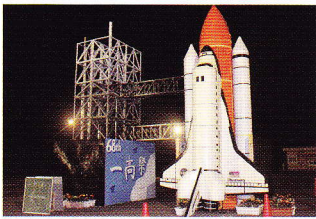
私たちの第68回一高祭では実行委員長の私を中心に文化祭の原点である文化とは何かを自分たちに問いながら準備を進めました。日々の生活の成果である文化は私たちにとってはどのようなものなのか、そしてそれを基に作られる文化祭はどうあるべきなのか。それを表しているのが今回の一高祭テーマ「紙ひこうき」です。

まず私たちは私たちの生活を紙飛行機に重ねました。土浦一高では、校訓の自主・協同・責任を胸に、一人一人が自分から十人十色のやり方で勉強や部活など自分のやりたいことを見つけ、仲間と協力してそれに取り組んでいます。それは様々な折り方があり個性が出て異なる飛び方をし、こだわればこだわるほど良いものができる紙飛行機に似ています。今年は去年よりも各クラスの個性が出るようにそれぞれのクラス企画の質が向上

し、充実するように努力しました。

また紙飛行機の特徴には親しみやすさもあります。一高祭は元々地域の方々など毎年多くの人におこしたくような地域的に親近感のある行事です。さらに、私たちの文化の基礎は先輩方の作り上げた気風なので一高を卒業した先輩方も慣れ親しんだ、楽しめる催しです。ですが、地域の文化交流の場として文化祭はもっと親しみやすくあるべきだという意見のもと、私たちは来場者の方が全ての場所をまわりやすくなるように多くの工夫を施しました。そのおかげもあり、今年は近年で一番の入場者数(6,386名)を記録することができました。

今年度の私たちの文化祭への思いは、先輩方からいただいた伝統と共に、次の代へ受け継がれ、既に来年の文化祭へ向けての行動が始まっています。次回、第69回一高祭では第68回よりも素晴らしいものが見られることと思います。ぜひその時は土浦一高に訪れ、懐かしの母校とともに現在の土浦一高の文化を楽しまれてはいかがでしょうか。



SGH海外フィールドワーク

SGH推進室長 豊島 卓

昨年、文部科学省からスーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定を受け2年目を迎えました。2年生40名を引率し、8月17日から22日、4泊6日の日程で、マレーシア・シンガポールでフィールドワークを行いました。

クアラルンプールでは、Malaysia Japan International Institute of Technology (マレーシア日本国際工科大学) 杉浦則夫教授(高20)ご指導のもと、各グループの研究テーマを踏まえ、現地の大学生と一緒にフィールドワークを行いました。主なテーマは、藻類バイオマスエネルギーを資源として有効活用するにはどのような課題があるか、外来生物は本当に不要か、日本の食材の認知度をあげるにはどのような工夫が必要か、どうすれば茨城の文化をPRできるか、などです。

街頭インタビューでは、生徒たちの話を傾けてくれる人を見つからない場面や、英語でのコミュニケーションが上手にできない場面等、多くの困難に直面していました。しかし、場所を移動したり、インタビュ어의対象を絞り込んだりと、その都度努力を重ねる様子は「さすが一高生」と思わせる姿でした。

シンガポールでは、本校金井大貴先生のご紹介で、The Ministry

of Education Language Center

(教育省言語センター)を訪ねました。中学4年生(16歳)の皆さんと日本語と英語を用いて、自分たちの研究テーマや日本文化について交流を行いました。また、国費で東京大学に留学している生徒さんにもご参加いただき、「同世代の外国人が見た日本」の話し聞くことができて大変有意義でした。

また、損保ジャパン日本興亜のご協力で、ベルジア損保(クアラルンプール)とテネット損保(シンガポール)にて、生徒たちが考えた新しい保険の提案や現地スタッスへの聞き取り調査等を行いました。

初めての海外フィールドワークのため、学ぶことが多くありました。この経験を次年度以降に活かしたい、さらに深化したものにしたいと思います。



職員室だより

数学科より

数学科主任 森田 泰弘

こんにちは。本年度数学科主任の森田と申します。今回は、数学科の番ということで簡単に紹介を。

我々数学科は11名おります。木村幸雄(本校5年目・進路指導部長)、片岡達郎(3年目・生徒指導部長)、富澤保夫(2年目・2年担任)、横倉敏治(2年目・2年担任)、須藤一也(9年目・3年主任)、中山徹也(7年目・3年副主任)、須田貴之(9年目・1年担任)、コンピュータ室長、森田泰弘(7年目・1年副主任、数学科主任)、藤田力(1年目・1年担任)、川北聖人(7年目・3年担任)、中川功一(非常勤)です。ご覧の通り、学校の中核となっている職員が多いことがお分かりいただけると思います。

さて、数学科職員室の雰囲気ですが、常に明るく、いつも和気藹々としております。授業へはチャイムの数分前に行き、空き時間には教材研究に動きます。授業から戻れば、その時々の生徒の様子を告げ、授業の仕方を検討し、教材について討議します。

また、休み時間・昼休み・放課後には、質問に来る生徒に対して、個性や到達度に応じた指導を行っております。

この様に休み時間・昼休み・放

課後を問わず、より良い教材・より効果的な指導を目指し、生徒の教養・知力の向上に努めております。

毎日の教材研究も大変ですが、考查の問題作成と採点が最も労力を要する仕事です。数学科では、学年担当者が問題を持ちより検討する、「問検」と呼ばれる会議があります。考查前は問題作成に頭を悩ませ、考查後は一日でも早く返却できるように夜遅くまで採点に取り組むことになりました。運動部の顧問も多く、休日返上で多忙を極めております。体調を崩さないかと心配になります。

そんな日々を過ごしている数学科職員ですが、前述の通りいつも和気藹々とやっております。その源は、数学科独自の四大行事にあります。年度当初の歓迎会、夏の旅行、秋の紅葉狩り、新年会など、行事が充実しており、それらの研修を通して、明日の教育への活力を養っております。

私ごとですが昨年度をもって退職なされた豊崎利明校長先生は、数学科の先生で、私が高校三年のときの担任でした。ご退職の年の入試結果に、微力ではありますが貢献することができ、多少の恩返しになったかなと思っております。今後も数学科一同、将来を担う生徒の育成に尽力して参りますので、よろしく願います。

事務室から

皆様、こんにちは。土浦一高事務室です。

私たちは、事務室長ほか五名（男性1名、女性4名）の職員が、様々な業務を行っています。

「はい、土浦一高です。」「こんにちは」電話がかかってきたり窓口にお客様がいらつしゃれば、まず私たちが応じます。事務室は外部の方と最初に接する学校の「顔」のようなところですから、常に明るくにかやかに対応するよう心がけています。

また、物品調達、職員の給与厚生、各種証明書の発行などのほか、3名の技術職員（男性2名、女性1名）とともに学校施設の管理、営繕も行っています。これらの業務を通して、生徒及び教職員が快適に学校生活が送れるようサポートしています。

私たちはこれからも、適切な事務処理に努め、皆様を支えていく「縁の下力持ち」となれますよう、そして明るい事務室であるよう努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

部活動報告

ソフトテニス部

2年G組 藤原 翼

現在、ソフトテニス部は、二年生七名と一年生六名の計十三名で、楽しさの中にも厳しさを持ちながら、本校テニスコートを主体として日々精力的に活動しています。

キャプテンを中心として行われる練習の中では、部員それぞれが

真剣に自分と向き合い、弱点の克服と技術の向上を目指しソフトテニスに取り組んでおります。さらに、練習試合や合宿等を積極的にを行い、大会での上位入賞を目指しています。

他校との練習試合は、公式戦に似た緊張感の中で行うため、自分の実力を知ることができ、試合の経験を積むこともできるので大切です。また、春と夏に行う毎年恒例の合宿は、一日中ラケットに触れることができ、普段の部活動よりも多くの時間を集中して練習や試合に充てることで、技術や技術を磨くことができます。そのため、部員は全員の昼も夜も同じ時間を同じ空間で過ごすので、チームワークの向上につながります。

このような練習の成果が現れ、今年度ソフトテニス部は、個人戦で関東大会に出場し、四回戦（ベスト32）へ進出することができました。また、その後に行われたインターハイ県予選の個人戦では、激闘の末優勝し、茨城県の一位として奈良県で行われたインターハイに出場しました。今後は、ソフトテニス部全体でさらに強くなり、個人戦と団体戦の両方で関東大会以上の大会へ出場することのできるチームになることが目標です。

最後になりましたが、私達は、毎日練習に来て指導して下さる顧問の菅原先生、支援して下さるOB・OGの方々をはじめとして、本当にたくさんの人達に感謝

最近の定時制の様子

「土浦一高定時制が地域の生涯学習機関の役割を十分に果たすために」。「学び直しを含め、充実した教育活動を一層推進するため」に。以上の職責を果たすべく、私たち定時制教職員は日々仕事に励んでいます。最近の教育活動のいくつかを振り返ります。

1 定時制通信制体育大会での主な活躍

以下のとおり、生徒たちは今年度もめざましい活躍をしました。

(1) 剣道部

①茨城県予選(個人戦)

優勝、準優勝

↓全国大会に個人戦2名、団体戦2名がエントリーされました。

②全国大会

・個人戦 3回戦進出

・団体戦 予選リーグを1位で通過し、ベスト8に進出しました。

(2) 柔道部

①茨城県予選

・個人戦 第3位

②全国大会

・団体戦 2回戦進出

(3) バドミントン部

①茨城県予選

・男子シングルス 優勝

・男子ダブルス 第3位
・女子シングルス 第3位
②全国大会
・団体戦 2回戦進出
2 明るく、生き生きとした学校生活

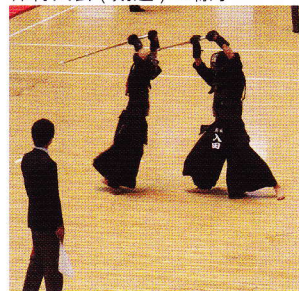
本校定時制では、様々な行事を実施しています。生徒会役員が中心となり計画する星光祭（文化祭）、春の遠足、球技会。将来について深く考える進路説明会。その他、卒業生による社会人講話、外部講師による性教育講演会…。和やかな雰囲気の中、生徒たちは生き生きとした学校生活を送っています。

3 広報活動の活発化

地域社会に定時制教育の理解を深めるために、今年度より、ホームページをこまめに更新することを中心としています。また中学生向けに「土浦一高定時制だより」を発行し、定期的に配布させていただきます。

本校定時制は、日々魅力ある教育活動を展開しています。地域からますます愛される土浦一高定時制の実現を目指して、これからも職員一同努力を続けていきたいと思っております。

平成27年度全国定時制通信制体育大会(剣道)の様子



全国大会ベスト8に進出しました

進路状況報告

平成27年度入試報告

東大・京大・東工大34名

東大23名で全国公立4位

筑波大57名

進路指導部長 木村 幸彦

平成27年度入試は、数学と理科が新学習指導要領のもとで実施された。過年度生に対しては移行措置がとられたが、昨年度入試での進学率が高かったため、過年度生は大幅な減少となり、センター試験・国公立大ともに志願者数が減少した。

センター試験志願者数は、約55万9千人で、前年度より約1500人の減少であった。国公立大の志願倍率は4・67倍(国立4・26、公立6・27倍)で、前年度の4・78倍よりやや低下し、4年連続の減少となった。本校生の多くが受験する難関大では、一橋大、名古屋大、大阪大が増加、九州大、京都大、東工大、北海道大はやや減少、東北大、東京大、神戸大は微減で全体としては前年並みであった。学部系統別では、理系はすべての系統で減少(特に「薬」「医」)したのに対して、文系では「法」「国際関係」など増加した系統があり、近年継続していた「文低理高」が沈静化した。

大学入試センター試験については、「生物」と「旧物理Ⅰ」の平均点の差が20点を超えたため、17年ぶりに得点調整が行われた。

「数学ⅡB」「地理B」「地学」「化学」など理系の生徒が多く受験する科目で平均点ダウンが目立った。昨年平均点が過去最低となった「国語」は、20点アップした。本校生の平均点は、文系が665・5点(昨年は+27・1点)、理系が676・3点(昨年は+11・1点)で、まずまずの結果であり、例年通り、第一志望(主に難関国立大)に挑戦した生徒が多かった。前述のような入試環境のため、現役生の合格率・進学率は、高まった。

入試結果について、主なものを挙げると以下のである。

東大23名(新卒15名)
京大6名(新卒5名)
東工大2名(新卒1名)
一橋大3名(新卒1名)
東北大学24名(新卒11名)
筑波大学57名(新卒40名)
国公立大医学科22名(新卒7名)

東大は昨年度21名、今年度23名と2名増加した。現役生は、文二に1名、文三に2名、理一に7名、理二に5名の計15名が合格し、全国公立高校の中で2番目の合格数であった。また、15名中、女子が6名(文科類2名、理科類4名)であった。地元筑波大は57名(内医学類9名)、東北大は24名が合格し、難関国公立大を目指す姿勢を崩さずによく健闘したといえる。しかしながら、本校をとりまく周囲の環境変化は急速に進んでおり、今後より一層の学習指導・進路指導の充実を図っていききたい。

平成27年度入試合格状況

国公立大学

私立大学

*新卒は内数です

大 学	合格者	新 卒
旭 川 医 科 大	1	
北 海 道 大	4	2
弘 前 大	1	1
東 北 大	24	11
秋 田 大	2	
山 形 大	1	
福 島 大	2	2
茨 城 大	15	11
筑 波 大	57	40
宇 都 宮 大	1	
埼 玉 大	1	1
千 葉 大	10	7
お茶の水女子大	7	6
東 京 大	23	15
東京医科歯科大	1	1
東京海洋大	1	1
東京外国語大	2	2
東京学芸大	2	1
東京工業大	2	1
東京農工大	3	1
一 橋 大	3	1
横浜国立大	6	5
金 沢 大	3	1

大 学	合格者	新 卒
山 梨 大	1	
信 州 大	1	
静 岡 大	1	1
名 古 屋 大	5	3
名古屋工業大	2	1
京 都 大	6	5
大 阪 大	3	3
神 戸 大	3	2
鳥 取 大	2	2
広 島 大	2	1
徳 島 大	1	
長 崎 大	2	
宮 崎 大	2	
琉 球 大	1	
福島県立医科大	1	1
茨城県立医療大	2	2
高崎経済大	2	2
千葉県立保健医療大	1	
首都大東京	2	2
横浜市立大	2	1
大阪府立大	3	2
国公立大計	217	139
(うち医学科)	22	7

大 学	合格者	新 卒
青山学院大	17	12
学習院大	15	9
慶 応 大	43	19
国際基督大	1	
上 智 大	18	10
中 央 大	27	13
津 田 塾 大	7	5
東京女子大	8	7
日本女子大	20	13
東京理科大	95	40
明 治 大	67	24
立 教 大	29	17
早 稲 田 大	68	29
法 政 大	38	24
北 里 大	10	2
芝 浦 工 大	10	7
日 本 大	24	11
立 命 館 大	2	
そ の 他	159	84
私立大計	658	326
合格者総数	875	465

平成二十八年年度進修同窓会総会の御案内

次年度進修同窓会・卒業周年記念祝賀式は、次の通り開催いたします

一、期日 平成二十八年四月九日（土）午後一時

二、場所 土浦第一高等学校体育館

卒業60周年	高8回、定6回
卒業50周年	高18回、定16回
卒業40周年	高28回・理5回、定26回
卒業25周年	高43回・理20回、定41回
卒業15周年	高53回・理30回、定51回

一般会員・周年記念該当会員の数多くの方が母校の門をくぐられることを期待しております。